

メアリ・テイラーの人生を考える

松原典子

1. はじめに
2. 誕生からニュージーランドに渡るまで
3. 新天地ニュージーランド
4. ニュージーランド滞在時
5. 帰国後のメアリ
6. さいごに

1. はじめに

メアリ・テイラー (Mary Taylor) といえば、エレン・ナッシと並んでブロンテ姉妹の親友でありながら、ギヤスケル夫人の『シャーロット・ブロンテの生涯』(1857)執筆時、資料提供等の対応に違いがあったことで知られている。またメアリは女権拡張論者としても注視されてきた。本論では、メアリの人生を辿りながら彼女の特性について考察していく。

ところでイギリスにおけるメアリ・テイラーが生きた時代の女性の権利に関しては、その半世紀ほど以前にM. ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』(1792)を刊行した。これがイギリス女性に発信された最初と考えられる。この時代のイギリスは農業革命を経て産業革命により国力を高めた。家庭内では父権性の時代であり、「家庭の天使」が女性に課された道徳的手本であった。つまり女性は結婚するまでは父の庇護を受け、結婚後は夫に従順でなければならなかったのだ。

今回メアリ・テイラーを取り上げた理由は、社会にセンセーションを起こした『ジェイン・エア』の作者シャーロット・ブロンテの一番の親友であったことである。司祭の娘が自立できる道はガヴァネスしかない。出来なければ老嬢として生きるしかなかった。メアリは境遇こそ異なるが、彼女も父権の時代にもがきながら自立に向かって生きてきたからこそシャーロットの生涯の友になりえたのだと考えられる。父権性から脱却し、さらに「家庭の天使」を捨てること。そして自立した人間になることを目標に、ヴィクトリア朝時代を生きた女性

を女権拡張論者と認識する。メアリの時代には1854年にクリミアに従軍したF. ナイチンゲールの活躍でそれまでの看護婦の地位が格段に改善された例もある。

ただフェミニズム、フェミニストが発するものはさまざまであり、20世紀に盛んになったウーマンリブ運動を思い浮かべることも出来るが、本論で定義する女権拡張論者とは、ヴィクトリア朝における女性の自立と「家庭の天使」からの脱却に成功した人物として論を進めていく。

2. 誕生からニュージーランドに渡るまで

メアリは1817年2月26日にヨークシャーのバーストールで生まれ、3月29日に洗礼を受けた。父ジョシュアと母アンには6人のこどもがおり、メアリは4番目で兄が3人、妹と弟であった。

テイラー家は、1660年に先祖が建てたレッド・ハウスに代々150年住み続けてきた。テイラー氏は、大陸やアメリカにヨークシャーのテキスタイルを輸出するウール事業と、銀行業を営むラディカルな人物で、自身も大陸に度々出かけ、コスモポリタンで広範囲な知識を持っていた。父の影響がメアリの人生観の土台となったと考えられる。

物心つく頃、メアリは近くのゴマソール・モラヴィアン・レディス・スクールに通った。その後、2歳年下のマーサと家から2・3マイル離れたマーフィールドのロウヘッド・スクールに入学し、1831年そこで国教会牧師の娘であるシャーロットやエレンと出会った。1832年以降、何度も互いの家に泊まったりした。シャーロットはブロンテ家を訪れた二人を、「メアリはピアノを弾いているし、マーサは小さなお口をべちゃくちゃ動かしている。」(Shorter, 151-152)と、我が家同然に振舞う姿を1838年6月7日、エレンに書き送っている。一方、非英国国教会徒のテイラー氏も、ブロンテ姉妹の訪問を歓迎した。メアリの「わたしは過激な急進派だったので、政治家のいったい誰が信頼できるの、皆無頼漢じゃないの……」(Gaskell, 83)とシャーロットと政治談議する急進的な少女の姿は、テイラー家の自由な気風からと思われる。

そんなメア리를家族や友人は、愛情をこめて「バグ」と、時には「ポリー」と呼んだ。しかしこの寄宿舎学校時代、エレンの「メアリとマーサ姉妹のドレスは廃った形……手袋は新品なのに、長く使えるように先が縫い閉じられ……濃紺のコートは短くなるまで着ふるされ、黒のビーバーのボンネットは縁取されていた。」(Shorter, 429)という観察から、テイラー家が銀行業も軍に卸す織布地業も、常に順調でなかったことがうかがわれる。家の内情がメアリに女性の自立を問題視するきっかけとなったと考えられる。シャーロットが、エレンよりメアリとより強く社会・政治・世界を語り合う関係であったのは、成長期の二人がエレンとは違う経済的不安の中にいたからなのかもしれない。

1840年のクリスマスにテイラー氏が負債を残し亡くなると、一家はレッド・ハウスからテイラー家の工場近隣のハンズワース・ハウスに転居したが、工場廃液など健康上問題のある土地だったことで、家族は憂鬱になり、結果、外の世界に逃避することになった。メアリが「ニュージーランドに行くらしいのでブルックロイドには来ない……」(Shorter, 207)という

情報を、シャーロットは1841年4月1日、エレンに書いている。しかしその頃、メアリは兄ジョンとイギリスでの生活を払拭するためにヨーロッパ大陸に渡り、ベルギー在住の従兄弟、エイブラハム・ディクソン一家と旅していた。そのためニュージーランド行きの話は、シャーロットにとって半信半疑だったはずである。

ところで1840年からマーサが学んでいたブリュッセルのシャトー・ドゥ・クーケルブルグで、メアリも音楽・フランス語・ドイツ語を学び始めたが、42年10月、マーサがコレラで亡くなったことをきっかけに、43年にメアリはドイツへ向かい、ハーゲンで少年たちに英語を教えながら、フレデリック・ハレ¹のピアノのレッスンを受けていた。シャーロットはメアリの異国で研鑽を積む姿と新天地行きを、「弟のワーリングとニュージーランド北島のポート・ニコルソン!!!」と驚きながらも、「家庭教師にも、学校の先生にも、帽子屋の店員にも、お針子にも、女中にもなれないし、なるつもりもない……イギリスにはメアリがやりたい仕事はないと思って国を出て行く。」(Shorter, 208)と、1841年4月2日にエミリに書いている。自立という潜在的願望は新天地でしか成就できないと理解したようだ。

3. 新天地ニュージーランド

1769年6月、ジェームズ・クックがエンデバー号でニュージーランドに到達後、11月15日の「国王陛下のために領有宣言」とユニオン・ジャックを掲揚したのは、クィーン・シャーロットの入り江あたりである。この頃、ニュージーランドへの捕鯨遠征が始まり、ヨーロッパ諸国から移民流入が起こっていた。捕鯨以外に、フラックスと呼ばれるニュージーランド麻やカウリの樹木が珍重物として取引された。

1820年以降ホイッグ・トーリー両政権が自由貿易政策を採用したことで、25年、ニュージーランド北島への植民地建設目的でロンドンに植民地会社が組織された。1838年にエドワード・ギボン・ウェイクフィールド主導下で設立されたニュージーランド会社は、11万エーカーの土地を購入した。産業革命後の都市人口の急激な増加と、低賃金や貧困者対策として、豊かで肥沃な大地への移民事業は経済的可能性を無限に秘め、イギリス国内状況の突破口であった。そしてウェイクフィールドの植民地論²によると、テイラー家が属する中流階級が指導的立場にあった。また乗船料金から船内生活にいたるまで階級差が存在した³。乗船者も機械工、職人、農業労働者、家内サーヴァントが多く、救貧院や教会の援助対象者は原則失格で、オーストラリア移民とは異なり、囚人や犯罪による年季奉公人はほとんどいなかった。1840年から41年の移民の約1割の655人が中流階級で、その出身地域はイングランドが8割以上、スコットランドが約15%、アイルランドやウェールズは1%前後だった。

1840年1月22日、オーロラ号がポートアイランドに入港し、その直後の2月6日、先住民民族マオリとの間でワイタンギ条約⁴が締結された。これにより、マオリの「アオテアロア」(「白く長い雲のたなびく地」ニュージーランド)はイギリスの直轄植民地に、そして1852年に自治植民地となった。同じ年、イギリスで「ニュージーランド政治構造法」が成立し、土地開発が可能となり移民は急激に増加した。一方、酋長たちはマオリの権利を確信し、イギリス人との共存共栄を信じ、貿易拡大を期待していたが、イギリス側にとっては勢力拡大が

最大の事項であった。ただマオリとパケハ（白人）の関係は良好であった。両者の間で争いが勃発したのはネルソン入植の土地測量時で、メアリが到着する頃に北部戦争へと拡大し、1846年にニュージーランド政府軍が鎮圧した。メアリが「マオリは穏やか。」(Shorter, 26)とエレンに1849年2月9日付けの手紙で書いているように、白人は銃を不携帯でも一人旅できる土地であった。ところで1820年、ンガプヒ首長ホンギ・ヒカはジョージ4世との面会後にマスケット銃を大量購入した。これがマオリの部族間闘争の一因と考えられるが、条約で約束されたマオリの土地の権利を強奪していくイギリス対全マオリの戦争へ拡大していった。それは条約に関して、マオリの酋長たちが内容を完全に理解できていなかったからである。つまり1814年以降、ニュージーランドに渡ったアングリカンが文字を持たないマオリに、キリスト教化活動を行う過程で口述によるマオリの伝統と文化を文字化していったからである。そのためマオリは条約内容を深く理解できなかつたと考えられる。それをイギリス側が上手く利用したというところであろう。ただマオリ戦争（1860-72）は、メアリがニュージーランドを離れた後のことである。

ところでチャールズ・ダーウィン乗船の測量船ビーグル号がガラパゴスから帰国途中の1835年12月30日、ニュージーランド北島最北端のコロタフェカに寄航した。その南方のラッセルがニュージーランド最初の首都とされるが、実際にはラッセルから3マイル離れ、ワイタンギ対岸のオキアトで、そこでウィリアム・ホブソン総督は任務を遂行した。そして1841年、首都はオークランドに、その後65年にメアリの過ごしたウェリントン⁵へ移った。ニュージーランドは環太平洋造山帯に位置し、2011年には大地震を経験しているが、当時も地震発生率が高く、1848年の大地震後に木造建築が推奨された。1855年のマグニチュード8.2のワイララバ地震発生時には、木造建築の倒壊はほとんどなかった。メアリも「頻繁に地震が起こっている……ウェリントンでは家屋の40%ほどが倒壊した。」(Shorter, 27)とエレンに書いている。ちなみにメアリの店舗・居宅は木造であった。

1893年のちょうどメアリの没年、ニュージーランドは世界で初めて女性が国政レベルの参政権を得たことで知られているが、国会は52年に開設されていた。当時の選挙権は、一部の男子のみが対象⁶だったが、55年頃から首相のウィリアム・フォックスなどの政治家や実業家が一般男性や女性の参政権を擁護し始めた。この女性参政権擁護運動は、開拓に女性の力が必要不可欠だったというニュージーランドの特殊性に起因している。

4. ニュージーランド滞在時

1842年4月、メアリより一足先に弟のウィリアム・ワーリング・テイラーが渡っていた。メアリは1845年3月18日、ルイザ・キャンベル号でロンドンを出発し、サンティアゴ経由で4ヵ月後の7月24日にウェリントン、当時のポート・ニコルソンに到着した。シャーロットは「メアリの手紙……北緯4度あたりで書かれた……手紙の最初にサンティアゴに着いた……」(Shorter, 298)と、エレンにメアリの航海情報を1845年6月1日に書いている。メアリからの情報をエレンとシャーロットは共有しあっていた。

メアリはテ・アロのハーバート通りで輸入業を営んでいたウィリアムの家に身を寄せ、ピ

アノ教授で貯めたお金でキューバ・ストリートに家を建て、良品を問屋から購入したり、イギリスの友人から送ってもらった品物を商った。メアリは「シャーロットがニュージーランドの私に10ポンド送金してくれた……10ポンドはシャーロットの年収の4分の1に相当する……」(Shorter, p.248)と、『シャーロット・ブロンテの生涯』執筆のギャスケルに書いている。経済的に貧窮していながらも、新天地で夢を追うメアリへの助力を願い、遠く離れていても常に心を寄り添わせていたシャーロットであった。シャーロットが1847年末ごろに発送した『ジェイン・エア』など処女小説が6ヶ月後に届くと、メアリは一ヶ月位かけ読んだ後、「説くべき教義がない……上手に質のいい読者を想定している……エミリはあの奇妙な『嵐が丘』を書いたとき、その読者層が視野に入っていたみたい……アンも立ち止まっては平凡な真実をお説教している。」(Shorter, 432)と、48年7月24日付けの手紙で、正直にしかも厳しい読後感を返信している。ただメアリが「セント・リヴァースと結婚した方が良かったと思う人に最近出会った。」(Shorter, 435)と、店の客か関係者と思われる人物の感想も書き添えている。

この手紙で「ジョンやジョーから金を借りて家畜を買う。すでに100ポンドくらい使った。……もっと買うつもり……2年以内に250ポンドを300ポンドにできる……お金ができればインド経由で帰国し旅行記を執筆する……ここでの健康も心配」(Shorter, 433)と、使用目的を記す一方で、危惧してもいる。この長いメアリの手紙には、シャーロットにとって未知の世界も書かれている。たとえば、メアリが「23ポンドで子供を生んだことのない若い雌牛を6頭買ったが、寒さで半数くらいが死ぬのではないかと思う。ある人は8ポンドで20頭の羊を買ったが全滅した……150頭のうち40頭残った……家畜を連れて谷を越えワイラウ平原へ、それからウェリントンまで海峡を渡って……」など飼育の過酷さを伝えながら、「この世界に住まないあなたは哀れだ。」(Shorter, 434)など、シャーロットに新天地を実体験してほしかったのだと思えてくる。一方、シャーロットはエレンに1847年6月5日付けの手紙で、「彼女はニュージーランドでの状況にまったく満足していない……彼女はニュージーランドをとて不毛の地だと気づいた……彼女は書いてはいないがとてもホームシックにかかっている……楽しさからはかけ離れた状況だ……」(Shorter, 352-353)と、またメアリ自身エレンに宛てた同じ日付の手紙で、「新世界は楽園ではない。でも悪夢ではない。」(Shorter, 26)、そして3年後の1850年2月9日、シャーロット宛てに「昨日海岸沿いを歩いた……ウェリントンに来て5年、一度も来たことがない……」(Shorter, 132)と告白している。これらから、メアリがエレンにもシャーロットにも想像不可能な緊張と葛藤と努力の毎日を送っていたと知らされる。潜在的可能性と強迫観念に最大限に挑戦することが、メアリにとっての生きる証だったのかもしれない。

ところで1849年8月、メアリの従姉妹のエレン・テイラーがジェイン・キャサリン号でウェリントンに着いた。エレンがシャーロットに宛てた、「最初私はメアリがまったく変わっていないと思った……かなりふけたと思う……初めての夜、夜中の2時から話した……学校か店を持つかどうか……店にした。」(Shorter, 154)から、学校という選択肢を持っていたことに驚かされる。最終的に兄弟の援助を受けて二人はディクソンとキューバの南西角のタウン・エイカー178を借り、2階建ての小さな家を建て、ウールや衣料、家畜な

どの必需品を買い、簿記会計をウィリアム⁷から教わり、卸の手助けを受け、店と家事を交代で切り盛りした。しかし1851年12月にエレンが結核で亡くなると、「私は一人家の中に座っている……一人でやっていくことにした。」(Shorter, 157)と悲嘆に暮れながらも信念を貫こうとする姿が重なっている。軌道に乗ると店員を雇い、ミシンの初輸入も果たした。1853年には『ウェリントン・アルマナック』誌に掲載されるほど成長し、「学校を出て以来、今が一番健康。」(Shorter, 400)と、57年1月8日、エレンに書いている。シャーロットはすでに亡くなり、エレンは最後の親友であった。安堵感と達成感を得たようだ。その後1858年6月、イングランドからの商品輸入を止め、テ・アロの土地を売った400ポンドを店に投資し、アシスタントに店を売却後、イギリスへの帰国を決心した。その6月4日にメアリは、「政治的危機です……地方選挙が2週間以内に行われます。ここ2年間で初めての……地方議会の議員の一人が前任の最高責任者で、次の再選挙の候補者を法に訴えるため最高裁判所が開かれるのを待っている……選挙以外に何の興味もない。」(Shorter, 403)とエレンに書いていることから、メアリが政治・社会を注視し続けていたことがわかる。しかし時代の先駆者としてビジネスに携わり成功したにもかかわらず、帰国を決意させたものは何か。それは肉親以外に心を許せる人間を得られなかったこと。つまり夢を追いかける場所は新天地であったが、心は常にヨークシャーにあったからだと考えられる。ついに1859年5月メアリは帰国の途に着いた。

5. 帰国後のメアリ

1860年、帰国したメアリはヨークシャーでその後の人生を過ごした。夏には特に快適ですばらしい眺めが見えるよう窓際に椅子を並べた終の棲家は、現在ゴマソール・ロッジというB&Bになっている。そこで33年間、メアリは因習に囚われない行動と発信に生きがいを求め、1863年にはエミリー・フェイスフルが発刊していた『ヴィクトリア・マガジン』に投稿し、その後66年から11年間、自らの信念を連載することで、女性の立場と生き方の打破を狙った。そしてこの連載を『女性の初めての義務』と題し70年にロンドンで出版した。これらは少女期に芽生えた信念に基づくもので、ウェリントンで経験し感受した女性の自立と地位向上から女権を強調するもの、つまり女性は自分の力で稼ぎ、金銭目当ての結婚は墜落の一步であるという信念である。1874年、若い女性4人とアルプス登山隊を組織し、その中の3人は女性初のモン・ブラン登頂者となった。この10週間の経験は75年『五人の女性によるスイス紀行』としてリーズで出版され、その後90年にはゴマソール周辺の女性たちの心理的・金銭的問題を取り上げた『ミス・マイルズ』を出版した。

ロンドンのレミントン社から出版された『ミス・マイルズ』は、『シャーリー』(1849)と同時期から書き続けられ、最終的に40年の時間差ができてしまった。1837年以降、一連の議会制定法により、女性の法的不平等が緩和されてきたことが、『ミス・マイルズ』を時代遅れで創造性に欠ける作品とした要因といえる。『ミス・マイルズ』にはゴマソールのサラ・マイルズ、マリア・ベル、ドーラ・ベル、アメリカ・ターナー、エリザ・ターナーや老嬢など多彩な未婚女性が登場し、レプトン村で繰り広げられる友情や母性が絡まる中、自立と幸

福を見つける物語である。マリアとドーラにはメアリの自伝的要素が投影され、ブロンテ姉妹、エレン・ナッシなどをモデルにしたようだ。29章からなる『ミス・マイルズ』の中の三つの章にドイツ語名が付いている。ちなみにフランス語の章は一章だけである。ベルギーよりドイツでの生活が結実し、思い入れの深い時間だったのだろうか。13章は、『シャーリー』24章「死の陰の谷」を髣髴させる「陰の谷で」で、こんなところにもシャーロットの影響があるのかと思われる。ところでジャネット・ホロウィッツ・マリーは『ミス・マイルズ』の序で、この作品を「教養小説」と分類している。ただディケンズの主人公たちの無知から道徳的啓蒙への旅とは異なる(xix)、と指摘している。

メアリは1893年3月1日にゴマソールのハイ・ロイドで76歳の一生を終え、聖メアリ教区教会に眠っている。ちなみにメアリより長生きしたのは次男のジョンと末子のウィリアムで、独身を通したり破産したりと、テイラー家も波乱に富んだ家系であった。

6. さいごに

当時、旅行家として功成するためには王立地理学協会に認定される必要があったが⁸、メアリのスイス登山挑戦と登頂は認定されなかった。1870年代はかなりの女性がレディー・トラベラーとして登場しているが、ほとんどが良家の出身で金銭的に問題を抱えていなかった。彼女たちは既婚・未婚に関係なく、資産を背景として「家庭の天使」がほとんど消滅した時代に生きたからである。19世紀を代表するレディー・トラベラーはイザベラ・バード(1831-1904)であるが、メアリとは20年の時間差がある。この20年は非常に大きい。20年前メアリはベルギーで教育を受け、自立を考えていた。多くのレディー・トラベラーと比べてもメアリの挑戦は意味が異なるのである。つまりメアリの資金源のほとんどは自身がニュージーランドで稼いだお金である。それをもとに60歳を目前のスイス登山成功は、世の中に女性の活動を知らしめた行動である。

さらに時代遅れとはなかったが、中流階級の娘として得た知識や体験を基にした『ミス・マイルズ』の出版は、メアリの長年の自立の集大成であったと言える。親友のブロンテ姉妹はカラー・ベル(シャーロット・ブロンテ)、エリス・ベル(エミリ・ブロンテ)、アクトン・ベル(アン・ブロンテ)という男女不明確なペン・ネームの使用を強いられた女性蔑視の時代を生きた。メアリが本名で出版できたことは作品のでき不出来に関わらず、またどのような評価を得ようと満足したことであろう。

帰国後のイギリスでは、女性参政権委員会設立(1866年)や地方選挙法改正により女性納税者に選挙権が認められる(1869年)など女性の権利が広がっていき、1882年の既婚女性財産法で妻が夫と別個に財産を管理可能となった。父権と連動する「家庭の天使」とは対極の人生を選択し、結婚をしない人生を選択したのは、この夫と妻の財産権にあったと想像することもできる。メアリがこれらの法律をいかに捉えたかは知る由もないが、メアリの人生を左右したと考えることも可能である。

このようにメアリ・テイラーの人生を辿ってみると、彼女が自立を果たし、「家庭の天使」像を打破というヴィクトリア朝社会因習への挑戦とその情熱は、ベルギーに留学し、ジェン

トルマン子息のような大陸ツアーから広範な知識を得、仕事から自立を成し遂げさせた。24歳から40歳までの30%が未婚だった時代に、中産階級の女性がビジネスに携わることは論外であったことから考えても、満足した人生であったろう。その時流に立ち向かった原点は、テイラー家の家風や没落にあると考えられる。そして自身の可能性と夢に向かって突っ走った人生は、時代に囚われずに生きた証人である。

『ジェイン・エア』でヒロインに自立と財産という権利を獲得させたシャーロット・ブロンテの第一の親友の人生を追ってみた。これをもとにシャーロットの文学がメアリからどのような影響を受けたかは今後の課題とする。

1840年11月20日エレンに宛てたシャーロットの「気高く、温かく、寛大で、深みのある感受に満ちています……この世でこれ以上気高い性格……彼女の知性と学識はまさに最高……」(Shorter, 197) というメアリ分析は根底にテイラー家とメアリの生来の特性を教えてくれる。彼女のすべてが女権に立ち向かわせたのである。

〈注〉

1. フレデリックは地元で有数のオルガニストで、ハレ交響楽団の創始者でドイツ名カール、渡英後、サーの称号を得たチャールズ・ハレの父である。
2. 彼の意図した「階級制植民論」は、植民がジェントルマン、または中流階級によって構成されるべきとするもので、「イギリス社会の階層をそのまま、一本の樹に移し変えるように、植民地に移植するべき」という主張とした。
3. 入植する労働者の一部に船賃を無料ないし割引した一方で、1等船室は75ポンド、2等は50ポンドで食事も4回、夕食も豪華でぶどう酒やデザートが出され、肉は船積みの羊を必要に応じ殺し、新鮮なミルクも階級差に応じ供された。
4. 第1条：マオリの全ての首長は、ニュージーランドにおける主権をイギリス国王に譲渡する。第2条：土地、森林、水産資源などについてのマオリの所有権はイギリス国王によって保証される。マオリ所有地の売買については、イギリス国王に先買権がある。第3条：イギリス国民として保護・特権をマオリに与える。
5. ウェリントンはナポレオンⅠ世に勝利し、ニュージーランド会社の後援者だったウェリントン公爵アーサー・ウェルズリーに因んで命名され、以前からまたそれ以後もポート・ニコルソンと、マオリ語ではテ・ワンガヌイ・ア・タラと呼ばれた。1839年9月20日、トリー号に乗ったニュージーランド会社の先遣隊が、続いて40年1月22日にオーロラ号に乗った150人の移民が、ウェリントン湾のハット川南端のピトニーに上陸した。
6. 「50ポンド以上の土地所有者および年10ポンド以上の借地人、都会では年10ポンド以上の借地代を払う戸主、田舎では5ポンド以上の借地代を払う戸主で、6ヶ月以上定住する。」という選挙権規程があった。
7. ニュージーランドの下院議員となったウィリアムは、ウェリントンのワーリング・テイラー・ストリートの名前の由来者である。メアリ帰国後に精神的混乱状態に陥り、1880年以降に詐欺行為で投獄された。
8. 1860年、レディ・フランクリンが北極へ夫の捜索に探検隊を送り続けたことが、北西航路発見に繋がったと認定され、王立地理学協会はゴールドメダルを授与した。

引用・参考文献

- Bronwy, Dalley & Bronwy. Labrum, ed., *Fragments—New Zealand Social & Cultural History*, Auckland University Press, 2000.
- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*, Oxford UP, 2001.
- Gérin Winifred, *Charlotte Brontë*, Oxford, 1967.
- Murry, Janet H. "An Introduction." *Mary Taylor*. Oxford UP, 1990.
- Shorter, Clement. *The Brontës—Life and Letters*, New York: Haskell House Publishers Ltd. 1969.
- Sinclair, Keith, ed. *The Oxford Illustrated History of New Zealand*, Oxford UP, 2001.
- Taylor, Mary. *Miss Miles or A Tale of Yorkshire Life 60 Years Age*, Oxford UP, 1990.
- Wright M. Harrison. *New Zealand, 1769-1840*, Harvard UP, 1980.
- 井上洋子・古賀邦子・富永桂子・松田昌子著、『ジェンダーの西洋史』、法律文化社、1998年。
- 佐藤知津子訳、Dorothy Middleton、『世界を旅した女性たち』、八坂書房、2002年。
- 沢井淳弘、『ニューージーランド殖民の歴史—イギリス帝国史の一環として』、昭和堂、2003年。
- 中岡洋訳、バーバラ・ホワイトヘッド著、『シャーロット・ブロンテ大好きなネル』、開文社出版、2000年。
- 中岡洋・内田能嗣監訳、Juliet Barker著、『ブロンテ家の人々 上・下』、彩流社、2006年。
- ニューージーランド学会編、『ニューージーランド百科事典』、春風社、2007年。
- <http://www.maggielblank.com/Land/Taylor.html> "Descendants of John Taylor", 2014年3月31日検索。